



(ひかみちゃん)

ほだかの里だより



(ほだかくん)

—大高歴史の会会報— 第55号

令和6年(2024) 10月 発行(秋号)

「ひかみちゃん」「ほだかくん」は、大高在住のイラストレーター大橋由起子さん作成の「大高歴史の会」のキャラクターです。大高は、昔々、「火上(かみ)の里」、または、「火高(か)の里」と呼ばれていました。

第 55 号 目 次

歴史へのひととき 芭蕉野ざらし紀行から「おくのほそ道」迄…	大高歴史の会のあゆみ・大高の行事予定 ……	P 4
早川善夫 … P1~2	大高「山口」の歴史探索(その2) …	山口初宏
大高のできごとあれこれ ……	P 3	P 5~6

歴史へのひととき 芭蕉野ざらし紀行から「おくのほそ道」迄

早川 善夫

野ざらし紀行は松尾芭蕉が門人千里を伴っての初めての文学的な旅に出たの貞享元年(1684)江戸時代中期の紀行文です。東海道を上り、伊勢山田、伊賀上野へ。千里と別れて大和、美濃大垣、名古屋、伊賀上野へ帰郷し越年。奈良・京都・大津・名古屋を訪ね江戸へ帰るまでの9か月にも及ぶ旅。

貞享元年(1684)8月松尾芭蕉が熱田に参拝した時のことを野ざらし紀行に「社頭大に破れ築地*1はたふれて草むらにかくる。かしこに縄をはりて小社*2の跡をしるし、ここに石をすゑて其神となのる。よもぎしのぶ心のままに生ひたるぞ中々にめでたきよりも心とまりける」と記して「しのぶさへかれて餅かふやどり哉」神前の茶店にて と吟じている。

当時の荒廃の状態がしのばれるのであって、あらゆる努力と犠牲とをもって之が造修方を幕府へ請願に及び、ようやく貞享3年(1686)綱吉の代に至りその目的が達せられた。

また、修葺工事は幕府直轄で行われ近世特筆に価するほど大規模のものであった。

この年の4月8日に^{ちようなほし}鑪始めを行い、本宮の社殿及び拝殿等を造営したほか、別宮八剣宮をはじめ、氷

上姉子神社等も7月9日に工事を終り、本宮及び八剣宮の遷宮を行ったのは7月21日で翌22日には氷上姉子神社等の遷宮をなし、自余の諸社も順次遷宮を行った。

綱吉の造替によって熱田神宮は積年の荒廃を一挙に回復しました。

貞享4年(1687)ふたたび芭蕉、熱田に詣でたところ敷きつめられた玉砂利で清く、社も立派に修復せられていた。

“磨き直す鏡も清し雪の花”^{おい}笈の小文 と吟じている。そして芭蕉は星崎について次の様にも吟じています。

“ね竟は松風の里、よびつぎは夜明てから、かさ寺はゆきの降日”

“ほしざきの闇をみよとや啼ちどり”(真蹟自画賛)

*1 築地

塀のこと 板塀に土壁を塗った松皮葺の屋根を載せた塀

*2 小社

熱田神宮の末社のこと

熱田神宮は江戸時代に入って明暦元年（1655）寛文2年（1662）の両度、尾張家の徳川光友が修理を加えています。熱田神宮の周辺が荒廃した状態になってしまったかは次のようなことも要因であったと思われます。

- 1 当時、尾張国と伊勢国を行き来する多くの旅人たちは数時間で伊勢湾を横断できる近道ではなく遠回りとなってしまう津島街道を選んだ様です。それは以下の様な要因だと思われます。
 - 1) 海難事故の回避
 - 2) 「津島を参らにゃ片参り」と言われ、伊勢神宮と天王信仰の総本社である津島神社と一緒に参る旅が推奨されていた。
 - 3) 名古屋城も人気スポットであった。
- 2 七里の渡しの東側の海を埋め立てて東浜御殿寛永元年（1624）と承応3年（1654）に七里の渡しの北西に西浜御殿を築きました。（東浜御殿は明治初期まで存在）
- 3 熱田新田は尾張藩が実施した最大規模の新田開発で正保3年（1646）に計画され慶安2年（1649）に完成しました。その規模は堀川から庄内川まで至った。そして江戸時代の経済の根幹は農業であった。

松尾芭蕉は江戸時代前期の俳諧師です。北村季吟

* 3、宗因の門下。1582年に「本能寺の変」で信長が討たれると、福地氏は他国へ落ち延び、その際、福地城（三重県伊賀市）は廃城になったとされる。

俳人松尾芭蕉は福地氏の一族とされ、城跡は芭蕉公園として整備されている。

芭蕉は季吟に20年遅れで生まれ、若き日の芭蕉は、この季吟に俳句を学んでいます。貞享3年（1686）春、芭蕉は古池の句を詠み俳句に心の世界を切り開いた。これが芭蕉が見いだした自分の俳句の道「芭蕉風」でした。「蕉風開眼」の句と呼ばれています。古池の句以前の芭蕉には心の世界を詠んだ句はほとんどないとのこと。古池の句を詠みその3年後に「おくのほそ道」の旅に旅立ちます。

“古池や蛙飛びこむ水のおと” 芭蕉

元禄2年（1689）3月27日早朝、芭蕉は江戸深川を出発。門弟たちと共に舟で千住に向った。千住は奥州道中第1番目の宿駅で当時は長旅の出立に際して

はひとつ先の宿駅まで見送ることが通常であった。

“夏草や^{つわもの}兵どもが夢の跡”

「おくのほそ道」最北端、平泉は奥州藤原氏の都、芭蕉と曾良は義経主従が立て籠って討死した高館に登りました。二人は藤原一族や義経たちをしのび、時のたつのも忘れて涙を落したとあります。

“閑さや岩にしみ入^{いる}蝉^{せみ}の声”

芭蕉は山寺の山上に立ち、そこで蝉の声を聞いているうちに、広大な天地に満ちる閑さを感じとった。

山寺の句は「岩にしみ入蝉の声」というこれも現実の音を聞いて心の中に閑さが広がったといっている。つまりこの句も古池やの句を発展させた句です。

芭蕉が「おくのほそ道」の旅を終えて都に上るや否や蕉門の俳句は一変したとのこと。「かるみ」こそが「おくのほそ道」のいちばんの旅みやげでした。

芭蕉は元禄2年8月20日過ぎに「おくのほそ道」の旅を終え大垣に着きました。

* 3 北村季吟

国学者 俳人。京の医師の子、蓮歌を紹巴、俳諧を松永貞徳、歌学を飛鳥井雅章について学ぶ。1674年、自著「俳諧埋木」によって俳諧の秘義を芭蕉に伝授したという。



芭蕉と曾良

<参考資料>

- ・熱田神宮
- ・NHKテレビテキスト 2013年10月 100分 de 名著「おくのほそ道」
- ・中日新聞 2020年（令和2年）6月9日夕刊
- ・中日新聞 2023年（令和5年）1月19日夕刊
- ・芭蕉俳句集 岩波文庫 （完）

<大高のできごと あれこれ>
[令和6年(2024) 7月～9月]

「龍宮社例祭」(7月20日:旧暦6月15日)

同日夜、高見町内の主催により字中川に鎮座する同社(住吉社)にて執り行われました。

「大高町盆踊り」(7月27日)(日)夜

大高学区大高北学区共同主催の盆踊り大会が復活し大高北小学校グラウンドにて行われました。

当日は山口晃司緑区観光大使の三味線演奏に続き、5年ぶりの盆踊りが始まり会場は大勢の参加者で溢れ大盛況でした。



「大高南学区夏まつり」(8月4、5日)(土日)夜

恒例の夏祭りが森の里公園にて行われました。

当日は好天に恵まれ老弱男女が集まり日頃の踊りを披露されていました。二日とも、すごい人で夜遅くまで賑わいました。



「大高祭り」名古屋市無形民俗文化財登録第1号

(8月9日登録)

市内の伝統行事や民俗芸能を保護するため市教育委員会が本年度新設した無形民俗文化財の市登録制度で緑区に伝わる「大高祭り」が第1号として登録されました。

「敬老祝賀会」(9月16日)(月)

敬老祝賀会が大高小学校体育館にて行われた。大高・大高北学区の主催で75歳以上の高齢者を招き、傘寿の方々には特製座布団がプレゼントされました。式典後は余興も披露されました。

「八幡社提灯祭り」9月16日(月)

夕方、川向の八幡社から辻の秋葉社への往復ちょうちん行列があり、その後、八幡社にて神事が行われました。

「大高^{ぬいぼ}斎田拔穂祭」(9月28日)(土)

初秋と思えない鬱陶しい蒸し暑さの下、11時から収穫をお祝いする拔穂祭が行われました。

神事後、斎田にて、たわわに実った稲穂を収穫する儀式も古式ゆかしく行われました。

当日は大高地域観光推進協議会主催の散策会も実施され大高の伝統行事をPRしました。



「下村神明社例祭」(9月29日)(日)

雨上がりの曇天の下、11時から丸根の下村神明社にて下村講の人々により例大祭が執り行われました。恒例の“大ぼたもち”を供えての例祭で今年も神前にて薪を炊いて神事が行われました。



<大高歴史の会のあゆみ>
[令和6年(2024)7月~9月]

<例会> [第2・第4月曜日 9:30~12:00 例会(勉強会)を八幡社参集所で開催]

第325回(7/8) ナゴヤ歴史探検 P90~91 「戦後の復旧と発展」災害も乗り越えて

第326回(7/22) ほだかの里だより第22号
P1~3(留と小春の歴史茶話) 大高あれこれ4<下村講>

第327回(8/26) ほだかの里だより第22号
P4~6 尾張の絵師達その(1) 下村湛山翁
大高の「十六羅漢図」を通して

第328回(9/9) P7 <大高のできごと あれこれ> [平成28年(2016)4~6月]
P8~9 大高の古文書 宗門送り一札(その1)
P10 <大高歴史の会のあゆみ> [平成28年(2016)4~6月]
P11 大高の歴史的石造物を訪ねて
[第22回] やごとかさでら・新四国一ばん大師 道標
P12 まちかど案内板の紹介 [第16回道しるべ地藏]

第329回(9/23) ナゴヤ歴史探検 P92~93 「猛威を振るった伊勢湾台風」
ほだかの里だより第23号
P1~3(留と小春の歴史茶話) 大高あれこれ4<大高川>

<その他の活動> [会のあれこれ情報]

「会報第54号(令和6年夏号)発行」(7月5日)

約670部、印刷、於 緑区社会福祉協議会。丁合は7月8日に実施

「あいち観光ボランティアガイドの会総会」(7月10日) 代表が出席

ウインクあいち18F セミナールームにて開催され、昨年度の事業、決算、監査報告と
本年度の計画予算案が審議・承認された。会員数69団体、新会員2団体

<ガイド実績> 史跡・町並み散策ガイド依頼受付窓口: 深谷篤 090-8952-8610

クラブツーリズム主催: 明智&養老鉄道冷酒列車1泊2日 酒蔵見学会

7月6日(土) 10名 (深)

7月20日(土) 9名 (深)

9月7日(土) 13名 (深)

9月6日(金) 大高城跡コース 鳴海歴史倶楽部 15名 (深、上)

9月28日(土) 抜穂祭見学ツアー 4名 (深)

ガイド実績 (7-9月) 5件 51名

大高の行事予定(2024年10月~2025年1月)

10月6日(日) 14:00~大高祭り 於 氷上姉子神社

10月26日(土) 10:00~みどり・シティ・フェスティバル 緑区民祭 於 大高緑地

11月16・17日(土・日) 10:00~16:00 大高地域コミセン祭り

11月23日(土) 9:30~大高学区ふれあいウォーキング

11月24日(日) 10:00~サムライ・ニンジャ フェスティバル 2024 於 大高緑地

12月31日(火)~1月1日(水) 各寺社越年行事(氷上姉子神社、八幡社、石神白龍社など)

1月13日(日) 10:00~成人式(大高中学校) 大高3学区合同

<お詫び>

先回、54号の行事予定にて下村、田中神明社例大祭の日が間違っていたことをお詫びいたします。

大高「山口」の歴史探索(その2)

山口 初宏

江戸時代の山口定成家

江戸時代に入ると第59代重春*は前述した通り大高村の代官庄屋となり籠池新田を開発した。

* (前号では重治と記されていましたが誤字でした。今回の重春が正字なのでお詫びして訂正いたします。)

<追記> 前54号における誤字訂正のお願い

誤 山口性 → 正 山口姓

誤 多々良性 → 正 多々良姓

誤 足利義光 → 正 足利義満

その後を継いだ重秋も養子である。大高村で庄屋兼御山廻り役を拝命し特別の由緒を以て苗字帯刀を許された。

次の後を継いだ重應^{しげまさ}も養子である。重秋の娘を妻に迎えて家督を継いだ。元和2年(1616)に尾張藩の重臣志水右衛門(甲斐守忠宗、初代藩主徳川義直の母、相応院の兄)が大高の知行所に来ると、右衛門から乗馬を拝領した。また、寛永18年(1641)には齋山^{いつきやま}に氏神として倉稻魂^{うかの み たまのみこと}命*を奉斎した。ほかに子新田、寅新田、己新田などを開拓したことも知られている。

* 倉稻魂命:五穀豊穡の神様、商売繁盛のご利益あり

その子重義は、先祖の任世が大切に所持していた護持仏の地蔵尊を緑区大高町鷺津5にある曹洞宗明忠院^{みょうちゅういん}に預け、大高村領主の志水甲斐守より羽織を拝領した。このように領主から手厚く遇された背景には村政に職務精励だけでなく、御用金の献納など、経済的にも志水家を助けていたからではないかと思われる。

そして齋山稻荷社の社殿を造営し、父祖と同じく同社を崇敬し奉仕した。

地蔵尊を明忠院に預け入れたことについては『大高町誌』次のような記述がある。『天正元年

(1573)、山口海老之丞が父母の追善供養のために大高村の枝郷・中之郷(現在の緑区大高町中屋敷)に創建。当初は孝養山明忠庵と称しており、広大な寺域に六坊を構える真言宗の寺であった。』『大高町誌』では海老之丞の法名「明忠浄光居士」と寺号の関連を指摘している。

その後、兵火によって長らく打ち捨てられていたが、元和5年(1619)に海老之丞の子孫ら山口氏によって再興された。この際に春江院の善庵和尚を中興開山に招いて曹洞宗に改宗、その末寺となった。

元和年間(1615-1624)に入り、大高の庄屋であった61代重應^{しげまさ}が領主として大高入りした志水甲斐守に願い出て、明忠庵を明忠院として再興した。

また、齋山稻荷社を奉斎していた62代重義の代に神仏習合時代とはいえ、自身が神主のため、仏である地蔵尊を明忠院に預け入れたのではないかと考えられる。



明忠院

その子重教^{しげのり}は志水甲斐守より苗字帯刀を許され、乗馬を拝領し、弓矢、鉄砲、具足を預かり扶持を与えられた。この厚遇ぶりは一庶民に対するものではない。これだけ大切にしなければならない

ほど当家は志水家にとって重要な存在だったことがうかがい知れる。

その後は養子^{じゅうよし}の重吉が継いだ。やはり志水家より苗字帯刀を許されて庄屋職を拝命し、七古新田を開いた。

その子重忠も苗字帯刀を許されて庄屋職を受け継ぎ、家督を養子の重安に譲った。重安は加木屋村の久野善之右衛門の四男に生まれ、重忠の長女と結婚して家を継いだ。父祖と同じく苗字帯刀を許され庄屋職を命じられている。

この重安の三女^く邦は山口一族の山本屋孫六^{しやうざ えもん}（庄左衛門）の弟孫七に嫁いだ。山本屋は代々酒造業を営み、孫七は兄孫六の酒造りを手伝っていた。そして孫七の子兵助^{へいすけ}は父が亡くなるまでは山本屋で働いていたが死後は山本屋を離れて母親の実家源兵衛家を頼り、さらに鳴海の下郷酒造に呼ばれて移った。兵助の子寅吉^{とらきち}は下郷本家の番頭を務めた。

緑区(大高)の酒造について

緑区の酒造の起源については明らかになっていないが、慶長年間(1596～1615)に酒造りがはじまり、慶長19年(1614)には大坂の陣に向け鳴海を通る徳川家康の軍勢^{しちざとや へえ}に下里弥兵衛が酒を振る舞ったと伝えられている。

江戸時代には鳴海や大高で酒造りが盛んに行なわれた。気候風土が酒造りに適していたほか、良質の米と水が近くで手に入りやすいこともあったのでしょう。鳴海、大高ともに扇川、大高川のどの水運を利用して、江戸まで樽に詰めた酒を送っていた。灘の酒より距離が近いこともあり、酒は中国酒^{ちゅうごくしゅ}と呼ばれ美味しいと評判になったという。元禄10年(1697)に酒株の制が敷かれ、無株者の酒造を禁じたが株の売買は自由に行われていた。当時の酒株帳によると大高は二百石で百二十石が弥三郎、八十石が庄左衛門となっている。

酒造家であった山口家の過去帳を見ると、元禄の頃に酒株帳に記された『弥三郎、庄左衛門』の名が見られ、二人がごく近い親族であったことが

わかる。山本屋は大高城の城下、東側(大高江明)の水の手を活かし山本屋敷と呼ばれる家屋を構え、江戸期には大いに酒造で興隆したが明治期に入り廃業するに至った。

尾張の酒造について

尾張藩主二代光友は酒を好み、先進地南部(奈良)より杜氏を招いて指導させるなど種々酒造を奨励したので、名古屋城下および尾張藩内の酒造業は急速に発展した。元禄の頃、酒類としては古酒、新酒、諸白^{しよはく}、次酒、^{なかみ}仲汲、焼酎、味醂酒、白酒等あり、元禄14年(1701)尾州領内の酒造高は114,960石にも達した。元禄10年(1697)の全国酒造高が909,337石であったので尾州酒造高が如何に大きかったかがわかる。(続)

<引用文献>山口定成著「山口家の歴史」

説明ガイドさん&新規会員 募集中です！

連絡先 (052) 623-2307)

大高の歴史を学び伝える

大高の歴史の会 会報
第55号 2024 年10月
(平成21年(2009)4月発足)

連絡先 (代表) : 山口 初宏
〒459-8001
名古屋市緑区大高町字天神44
052-623-2307
散策関係 担当 : 深谷 篤
090-8952-8610

会報は年4回発行の予定です
(冬1月、春4月、夏7月、秋10月)
会報バックナンバーご希望の方は上記連絡先
へお問い合わせ願います

(本号の編集は山口初宏が担当しました)